
『レイシー～d i s s o n a n c e～』

梅花空木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『レイシー』dissonance』

【Nコード】

N4942I

【作者名】

梅花空木

【あらすじ】

ある朝ジャックに届いたのは、親友・グレンからの手紙だった。グレンから初めて手紙をもらったジャックは喜び、約束の日を心待ちにするが…。

朝日がベザリウス家のバラ園に差し、バラたちが一層美しく見える。

「ジャック様？…失礼致します。」軽いノックの後メイドが部屋に入ってきて、

「おはようございます。」と丁寧に挨拶をする。

「ああ、おはよう。今日も笑顔が素敵だね。その笑顔に私の心はいつも癒されているんだ。」メイドに近づき、にこりと笑う。

「なっ…ご、ご冗談を！…そっんなことより…これをつ…。」メイドは顔を真っ赤にして、手紙を半ば押し付ける様に渡し、部屋を飛び出していく。

「本当のことなのに…かわいいなあ。」クスツと笑い、手紙の送り主を見て驚く。

「グレンからだっ！」思わず口に出し、いそいそと封を切る。

『話がある』という一言と、待ち合わせの日付が書いてあるだけの短い手紙。それでもグレンから手紙をもらったことなんて初めてでとても嬉しい。

「もうグレンてば、そっけないんだからあー。」そう独り言を言いつつも、顔が緩むのを抑えられなかった。

約束当日。入念に服を選び、鏡の前で何回も服を整える。

「話かあーなんだろう？そっいえばグレンから誘ってくれたのって初めてだなあ。」期待に胸を膨らませる。

いつものバスカビル家の木の下へ行くと、グレンはもう待っていた。

「グレン！」思わず名前を呼んで、駆け寄る。

「グレンが手紙くれるなんて嬉しいよ！これはほんの気持ちだけど

「受け取って？」朝摘んできたばかりのバラに軽く口付けて、グレンの耳にかける。グレンの艶やかな黒髪に真つ赤なバラがいつそう映えて、美しい。

「うん！綺麗だ。」優しくにつこりと笑う。

「。。。また、お前はそんないい加減な。。。」「グレンはぶつぶつ言いつつも、照れてるのか、目線合わせようとしない。

「で？話っていうのはなんだい？」待ちきれなくて自分から切り出す。

「ああ、コレ。。。」「グレンは懷から紙を出した。

「楽譜。。。」「丁寧に音符が書かれている。

「それは。。。私が作った曲だ。お前にその曲でオルゴールを作ってもらいたいと思つて、呼んだんだ。。。頼めるか？」「グレンが愛しそうに楽譜を見てから、少し不安そうに見つめてくる。

「御安い御用だよ！。。。曲のタイトルを聞いていいかい？」「タイトル名を書く欄が空欄だったのだ。

「。。。レイシー。」「グレンは少し躊躇った後呟いた。

「。。。もしかして女の子？その子にあげるの？」「普通に言つたつもりなのに、なんとなく棘のある言い方になってしまう。

「お前が前作ってくれたオルゴールが気に入ったらしくてな。今度私が作ったレイシーの曲をオルゴールにしてもらつて、それを渡すんだ。」「レイシーとした約束を無邪気な顔で話すグレン。

「グレンはその子のこと。。。その、好きなの？」「なんだかおいてけぼりにされた様で心細い。

「。。。『すき』とは何だ？でも彼女といると心が暖まる気がして一緒にいると幸せなんだ。」「そうレイシーのことを話して、グレンは少し照れ臭そうに笑った。

（それが恋だよ、グレン。）胸の中がもやもやする。

「ねえねえ！レイシーってどんな子？かわいい？」「努めて明るく言う。

「べ、別に…お前には関係ないだろう!」グレンは顔を真っ赤にする。

「なんでだよ。気になるんだから教えてくれたっていいだろう!」
からかい口調で言うが、本心は違う。

(キミの心を捕らえた子がどんな子か、知りたい。)

「…レイシーは、明るくて太陽みたいなんだ…。」渋々と言った様子でグレンが話す。

「ふーん?まさか、レイシーにもそんな素っ気ないのかい?」ひとつ疑問に思った。

「…私はいつもこのままだが…。」グレンが困惑した顔をする。

「ダメダメ!女の子には優しくしなきゃ!」チツチツと人差し指を振ってみせる。

「いいかい?『キミは私の心を暖めてくれる太陽だ』ぐらいのこと
言ってあげるんだ。」半ばヤケだ。

「それは…優しくするのは違うんじゃないか?」グレンが言う。
「でも、誉められていい気のしない人なんていないだろ?」無理矢理に笑顔を作った。

グレンに渡す日の当日。

「グレン、こんな感じでどう?懐中時計にしてみたんだけど…。」
言いながら、パカッと開く。

♪♪♪♪

「…なんだか、哀しい調だな。」オルゴールに聴き入っていたグレンがぼそつと呟く。

「あ、れ?イメージと違った?けっこうオルゴールで聴くと哀し
うになっちゃう曲とかあるんだよね。それでも…。」焦った。曲
をオルゴールに入れる時に、曲調を少し変えてしまったのだ。

(グレンに想われてるレイシーが羨ましかったから。)

「まあ少し意外だったが…。この方がいいかもしれないしな。あり
がとう。」懐中時計を大事にそうに持ち、にこりと笑うグレン。

グレン…グレン…グレン…。

キミはこんなにも近くにいるのに、どうしてこの手は、この想いは
キミに届かないのだろう。

こんなにも私は、キミを想っているのに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4942i/>

『レイシー～dissonance～』

2010年10月20日09時47分発行